

# 第三章 シビックで朝まで

東野圭吾

2021年12月11日

## 1

改札口かいさつぐちを出て腕時計うでどけいを見ると、二本にほんの針はりは午後8時半を少し過ぎたところを指していた。おかしいなと思い、周囲しゅういを見回した。案の定あんじょう、時刻表じこくひょうの上に取り付けられた時計は、八時四十五分を示している。浪矢貴之たかゆきは口元くちがを歪め、舌打ちした。オンボロ時計め、また狂くるってやがる。

大学の合格祝ごうかくいで父親ふいかもらった時計は、最近になって不意に止まることが多くなった。20年も使っていれば当然か。そろそろクォーツに買い替えようかなと考えた。水晶発振方式すいしょうはっしんの画期的な時計は、かつては軽自動車並みの値段がしたが、最近では急速に低価格化かかくしている。

駅を出て、商店街を歩いた。この時間になっても、まだ開いている店があることに驚いた。外から覗いた限りでは、どの店もなかなか繁盛はんじょうしているらしい。ニュータウンができて新しい住人じゅうにんが増え、駅前商店街の需要じゅうようが高まった、と聞いたことがある。